



この本が、うまれるまで

～編集者からのことば～

カバーデザイン：成瀬慧

## 井上威朗（講談社第一編集部）

2011年、節電の暑い夏が始まりでした。

震災直後の現地取材の嵐が一段落したあの頃、講談社が刊行するノンフィクション雑誌「g2」の編集をしていた私は、多くの日本人同様、東京電力という存在に大きな疑問を持つようになっていました。そこで、ジャーナリストの斎藤貴男氏に、「日本人と東京電力」についてゼロから執筆していただくと考えたのでした。

震災対応の欺瞞、原発安全神話の嘘、放射線への無理解など、取材して明らかにすべきことは無数にありました。こうして、ひたすらさまざまな関係者のアポを取り、取材を重ねる日々が始まりました。その成果はのちに『「東京電力」研究 排除の系譜』として上梓されることになるのですが、やっているときはただ暑くて大変だったのを覚えています。そして元東京電力社員の方に会うために私鉄の駅からひたすら歩いた長い道中、汗を流しながら斎藤さんと交わした雑談で、私は初めて伊東監督のことを知ったのです。

マグロ漁船の被ばくについて徹底的に調査し、毎年番組を作り続けている放送局がある。放送内容は自分が見ても驚くことばかりなのだが、なぜか注目されていないのだ――。

こんな話を斎藤さんから聞いた私は、すぐに「その番組、見せてください」と頼み、次の取材の際に、「南海放送 棄てられたヒバク」と書かれたDVD-Rを貸してもらったのです。さっそく再生してみた内容には、たしかに驚くしかありませんでした。こんな大事を、どうして自分は知らなかったのか。そんな恥ずかしい思いをごまかすためかもしれません。大規模被ばくを隠蔽しようとし、被ばく者がどうなったのかを知ろうともしない政府とマスコミ、双方に強い怒りを感じました。そんなに知らせたくないのなら、本にして風穴を開けてやろうじゃないか――。これが書籍化の出発点です。

最初は伊東監督の連絡先もわからなかったのですが、南海放送に原稿依頼の手紙を書きました。すると伊東監督から長文のメールが返ってきたのです。以下、その一部を転載します。

\* \* \*

この事件を追いかけはじめたのは8年前です。

以来、ほぼ毎年のように放送してきました。

しかし、ほとんど誰にも見向きもされないまま、今年3月11日に至りました。

日本全土、アメリカほぼ全土を高濃度に汚染した巨大被ばく事件にも関わらず、これだけ完璧なまでに封印され、ほとんどの人々の記憶から消し去られました。

これは、世界的にみても、類をみない事件ではないかと思います。

また、伝えようとしても関心をもってもらえない「被ばく問題」に、何度も何度も挫折しかけました。

ところが、3.11によって、日本中の「放射能」に関心が向きました。

しかし、特に低線量放射能による被ばく、特に内部被ばくについては、国際的にオミットされてきたため、ほとんど資料がなく、今後何が起こるのか、わからない状態です。

しかし、日本中の人々が、将来、どのような被害がでるのかを知りたがっています。

その鍵が、このビキニ事件には隠されています。

加害者が何を行ったのか。

被害者であるはずの日本政府が何をしたのか。

被害者である国民がどうなったのか。

そして、特に強い被ばくをしたマグロ船乗組員たちがどうなったのか。

それらを解明すれば福島の今後も見えてきます。

封印された巨大被ばく事件を解き明かし、多くの人（被害者である日本人、そして、アメリカ国民）に伝えることは非常に大切なことだと思っています。

歴史物語ではないこと。

まさに今生きる人たちが被害を受けていること。

そして、福島事故の未来が見えること。

その3つを伝えられればと思います。

\* \* \*

このメールを受け取ったときの興奮はまだ覚えています。すぐに南海放送に電話し、すぐに書籍化のプロジェクトをはじめましょう、とガラにもなく熱く伊東さんに話しました。

2011年11月に南海放送を訪ね、河田会長、大西プロデューサーと会いました。お二人とも、伊東監督に負けない熱意で、この熱意を「本」という形で世に送ることの意義を喜んでくださいました。逆に伊東監督が「そうはいつでも、僕は長い文章を書いたことないし……」と尻込みされていたのが印象的でした。

あとは原稿を催促するばかりです。ところが喜ばしいことに、書籍化より先に『放射線を浴びたX年後』という形での映画化が実現してしまいました。斎藤貴男氏とポレポレ東中野に行き、満場の観衆が身じろぎもせず、食い入るように見入っていたことに感動しました。少し伊東監督と話した後、近くの居酒屋で斎藤氏と「この映画はすごいことになるんじゃないか」と盛り上がった記憶があります。

実際、斎藤氏の見立ては正しく、『X年後』が賞を総ナメにする好評を博したことはご案内の通りです。しかしそうなる伊東監督もよりいっそう忙しくなり、執筆がどうしても進みません。取材データが多すぎて、どう構成していいのか見当がつかなくなった、ということです。そこで私は一計を案じて、フライデー記者の岩崎大輔氏を仲間に引き込みました。10年前、個人情報保護法の成立に抵抗するために闘った岩崎氏は、私が絶大な信頼を置いている記者でもあります。餅は餅屋、彼が構成のアドバイスをし、打ち合わせを重ね、データ整理の道しるべをつとめることで、2013年の終わりにようやく原稿が完成したのでした。

その後、私がノンフィクションの部署を離れ、馬淵千夏氏へのバトンタッチに時間を要したため作業が遅れましたが、できあがった本の中身は完璧だと思います。初めて映像を観たときの怒り、伊東監督のメールを読んだときの興奮、すべて見事に詰め込まれています。監督の伝えたい「3つ」を日本中で共有できる良書になったこと、とても嬉しいです。



## 馬淵千夏（講談社学芸図書出版部）

本書の担当者である井上から突然、「異動が決まった。残していく企画を引き継いでもらえないか？」と電話がかかってきたのは、今年の、まだ春と呼ぶには少し早い時期のことでした。それまで、主に学術系の書籍づくりに携わってきた私にとっては、同じ書籍とはいえ、ノンフィクションというジャンルは、まったくの未知の世界。自分にできるのだろうかという不安がなかったといえば嘘になります。しかし、私に編集のノウハウをゼロから叩き込んでくれた恩人であり、編集者として心から尊敬する先輩・井上からの頼みとあらば、断るという選択肢は私にはありません。というよりも、井上がつくろうとしていた本が面白くないはずがないと、これまでの経験からよくわかっていました。不安よりも好奇心が勝った瞬間、企画内容もよく聞かぬうちに、もらったその電話でお引き受けしていたことを思い出します。

伊東監督から最終稿が届いたのは、夏真っ盛りの頃でした。当初の「きっと面白いだろう」の想像をはるかに超え、そこに描かれている世界は衝撃的でした。本当にお恥ずかしい話なのですが、この作品を引き継ぐことになるまで、伊東監督、そして映画『X年後』の存在を存じ上げず、さらに申し上げれば、あまりの無知さに自分で悲しくなりますが、私は「ビキニ事件＝第五福竜丸事件」だと思っていた一人でした。興奮しながら一気に原稿を読み終えた後、「映画が観たい！ なんとしてでも観たい!!」と、強く思ったことを記憶しています。また、「これは一刻でも早く、映画を観てくださった方はもちろんのこと、多くの読者にお届けしなければいけない」という思いも同時に抱きました。

もうこの時点で、原稿はほぼ完成していましたので、これをどう実際の書籍の形にもっていくかが私の任務となりました。「幅広い読者層、特に高校生にも読んでもらえるようにするにはどうしたらいいか」など、頭の中でいろいろと構想を練りながら、急ピッチで作業を進めました。そんななか、飛び込んできた情報開示のニュース。まさに「ビキニ事件は終わっていない」（「ビキニ、ビキニ」と言っていると「水爆実験はビキニだけじゃないでしょ」と、伊東監督に怒られてしまいますが）。編集部でパソコンに向かって作業中、「NEW!」の黄色い文字

が踊るヤフーのニュースを発見、「えっ、なにこれ？」と我が目を疑いながらマウスをクリックしたのを覚えています。この問題は現在も進行形の話なのだと、まざまざと感じた一瞬でした。

次の一文は、本書の中の伊東監督の言葉です。「同業者から『いいネタ、つかんだね』と言われることが多くなった」――。しかし、「いいネタ」と呼べてしまうような、そんな生半可な問題ではないということは、この本をお読みくださいれば、すぐにおわかりいただけるであろうと思います。事件から半世紀を経て、証言を集めることがどれほど困難であるか。隠蔽された事件の真相を追い求め、ときにはもがき、葛藤しながらも、それでも諦めることなく、伊東監督のひた走る姿。書籍版『X年後』は、映画の中では描かれていない、地方局ディレクターの10年にも及ぶ孤独な闘いの記録でもあります。

まだ厳しい暑さの残るある日。都内の自主上映の会場に、愛媛からいらっしゃる監督をたずねました。ようやく監督にお目にかかることができるうれしさとともに、私は幾分緊張もしていました。このような事件を追い続けていらっしゃる方だから、さぞ厳しく、怖い方だろうと思っていたのです。しかし、私の想像はいい意味で裏切られました。目の前の伊東監督は、穏やかで、とても物腰の柔らかい方でした。後から伺ったのですが「前職は幼稚園の先生だった」とのこと。私はなるほどなと、そのとき得心したのでした。

本の中で、監督ご自身は、「この僕なんか」などの言い方をされていらっしゃいますが、本当はものすごく「熱い魂」をもった方だと、作業をご一緒させていただくうちに、だんだんとわかってきました。少しネタバレになってしまいますが、本の終盤、監督のこんな言葉が出てきます――「伊予の男を馬鹿にするなよ」。これは、これからも事件を追い続けるのだという強い決意が込められた、私の大好きなセリフです。

この伊東監督の熱い思いと、そして事件の真相、水爆被害の実情を、一人でも多くの方にお届けできましたら、本書に関わらせていただいた者として、この上なく幸せに思います。